正倉院

―（一）―

岩波写真文庫　40

正倉院（一）40

岩波写眞文庫 40 正倉院（一）

監修 和田軍一
編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
写眞 宮内廳書陵部

中倉床下よりみた拜観者

正倉院――上代から当時の様式を厳密に守って今に傳えられたあの校倉！その名は子供たちにも普く教えられ、あの特異な建築の古風な写眞を國史の本で見た記憶は大抵の人がもっている。千数百年前の東洋の燦然たる古美術や古文書がここに夥しく祕藏されていることも、遠く近東や欧洲との文明の交流を実証する珍奇な器物や薬品さえ見出されることも、既に常識となっている。しかし、國民のうち何人が、民族の誇りといわれ人類の貴重な遺産といわれるこの宝庫を、親しく訪れたことがあるだろうか。この勅封の祕庫の中で今なお日々営まれている不思議な発掘について知っているであろうか。宮内廳の好意によってここに初めてその眞相が開かれた。

目次

定価100円 1951年8月25日第1刷発行 1959年4月20日 第9刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

今日の正倉院

「青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり」いにしえの人のこう歌った平城京の、盛時のおもかげこそ今はあからさまに再現するによしもないが、なお昔のままにみやびた姿を奈良市の東郊にかすませている嫩草山の山すそには、大佛殿を中心にした往昔の総國分寺東大寺の結構をしのぶことができる。大佛殿の長い廻廊について曲り、片側にはそのまま廻廊が、片側には松の疎林がつづく正倉院への道に歩をはこぶと閑寂の氣がそぞろ私たちを古都の囘想へとさそってくれる。やがて片側の廻廊が切れ、しばし坂を下ると前景が開けて、左には低く廣い池が水をよどませ、右には昔ここに東大寺講堂をめぐって三面僧房の建ち並んだ旧跡が、点々と松や樫の立つ廣い芝生になっている地域にみちびかれる。このあたりは、すでに正倉院敷地の一部で、やがて正面に正倉院正門と、左右に延びる白い練塀が現われる。正門を入るとまっすぐにひろい白砂の道がつづき、左に徳川時代宝庫を守った四聖坊の庭、右に松杉の大樹がそびえてすがすがしい。ゆるやかな芝生の斜面、数尺の高さのところに、重厚な感じの宝庫は、たくましい柱列を並べ、高く大きく立っている。今に残って天平の「たからぐら」の面目を傳える勅封藏正倉院はもと東大寺正倉院中の一倉で、亡びなかったなら、このあたり一帶には、重要物資を入れたいくつかの正倉が甍を並べていたはずである。

環　境

➡ 大佛殿の棟の西端より正倉院をのぞむ. 中央にみえる林は正倉院の敷地で右上に白く宝庫の屋根が光っている. その昔正倉院が東大寺の宝庫であったということも, このような地理的関係をみるとはっきりとわかってくる.

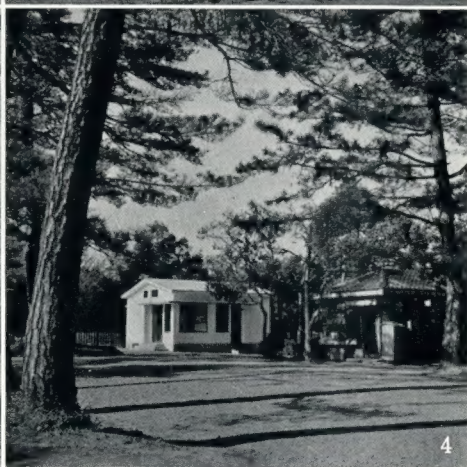
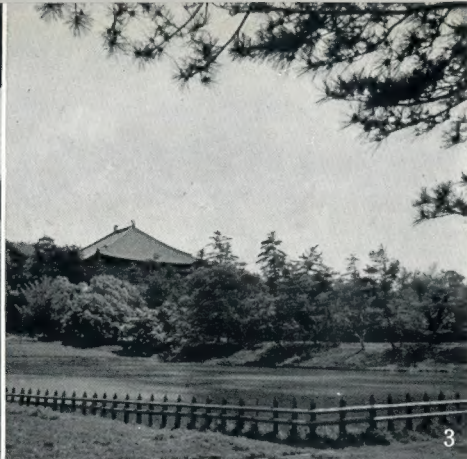
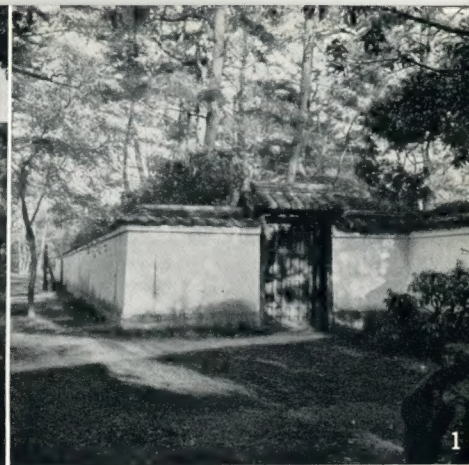
⬆ 二月堂への裏参道と正倉院正門へゆく道の角にある道しるべ. 大佛殿西廻廊の西南の角にも正倉院の名を刻んだ道標がある.

↖ 正倉院の正門. 年一回の'曝涼'の時以外は固く閉されている. 特別に参観を許されている学生團体や, 文化團体は側門から案内される. 参観を許されない一般の人々がこの門前で立ち去りなげに佇んでいる姿をみかける.

⬅ 大佛殿の北(裏側)の講堂跡よりみる正倉院の白壁.

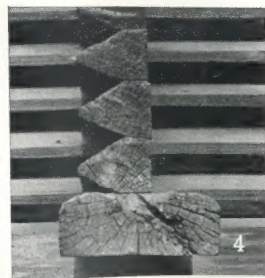
環　　境

1） 正倉院の西南にある池．貯水池に利用されているが，名前はついていない．2） 宝庫は二重の囲で厳重に外とさえぎられている．これは，外構北側の道．この辺一帯は民家が近接しているので一番火災の危険が多いと事務所では心配している．3） 貯水池と大佛殿．この辺りは休日など，東大寺見物の客で賑うところ．4） 正門へゆく道の左側にある皇宮警察の派出所．ここの警官が構内，構外の巡視に晝夜当っている．5） 正倉院の西，東大寺の轉害門（てがいもん）へゆく道にある小学校．木造建築では火災が起りやすく，宝庫に類焼するおそれがあるというので，宮内省からの助成金でコンクリート建になったという．6） 轉害門より正倉院をみる．昔，東大寺の僧たちが街にでる時に往復した道でこの道は眞直に宝庫の傍をとおり，僧房につづいていた．7） 正門の左手にある正倉院事務所．8） 正面の白壁．東大寺の講堂の東西北の三面を取り囲むように建てられていた僧房はこの白壁のあたりまであったといわれる．

環　　境

1）宝庫，仮宝庫へゆく通用門．通称ガラガラ門．2）ガラガラ門の内側．鎖の下には錘りがついていて自動的に閉る仕掛になっている．開閉の音は遠くまで響く．3）宝庫の西側．内構と外構との間である．西風に備えてとくに廣くとってある．4）城壁のような内構．この門の左奥に宝庫がある．この道は囲のない頃人々の往来した道である．左側はもと農家の屋敷のあった辺り．5）宝庫の西裏手の道．火災の際消防自動車が通れるように道幅も廣くとってある．6）宝庫裏手雑司ロの貯水池．この辺は水利の便が悪いので，構外の道路からも使えるようになっている．水量は2,000石．7）西門．正門の西側にある門で，通用門になっている．つきあたりは持佛堂．8）扉を開けた正門．右奥に宝庫がみえる，白砂の道がすがすがしい．この門はもと四聖坊（ししょうぼう）(8頁参照)の門の移建である．

持　佛　堂　附　近

1）持佛堂．東大寺の塔頭四聖坊の持佛堂．この坊には宝庫守護を司る僧がいた．堂は300年ほど前の建築で，以前は秋の‘曝涼’の時の休憩所に使われていた．2）持佛堂の裏の築山．樹木の中に層塔や石燈籠が配される．3）持佛堂の左裏手の乾蔵．四聖坊の戌亥に当るのでこの名がある．空の辛櫃等が入れてある．4）仮宝庫．持佛堂の右手奥にある．5）持佛堂の池．古風な石橋を渡ると宝庫の道へ出る．池は最近深く掘り下げて貯水池にしてある．6）持佛堂より仮宝庫を望む．仮宝庫の前は四聖坊の書院などのあったところ．江戸時代には‘曝涼’の際の勅使の休所，‘御物’検査の場所に使われた．その歴史を傳えるために書院の礎石が残されている．

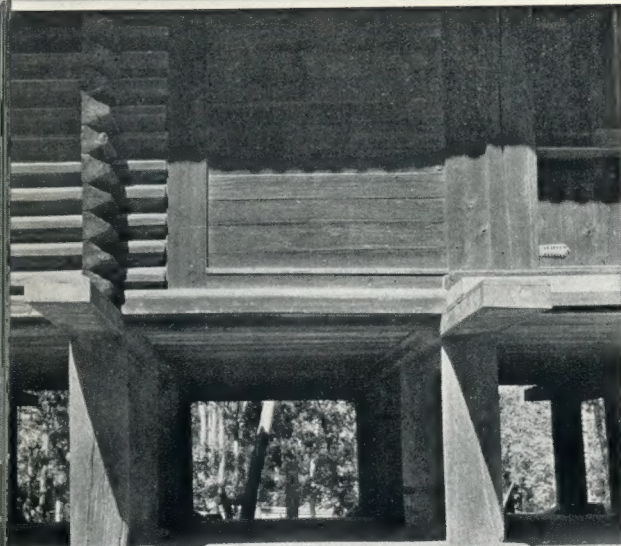
聖語蔵附近

1) 内側からみた正門. 道は廣く豊かな感じを與える. 向って左に松の疎林があって聖語蔵(しょうごぞう)がある. 2) 聖語蔵. もと宝庫の西, 轉害門の内側にあった東大寺塔頭尊勝院(そんじょういん)の経蔵で, 平安時代の建築. 明治27年, 宮内省に献納. ここに移建された. 隋や唐, 奈良朝の写経を中心に約5,000巻の経巻が入っている. 3) 聖語蔵入口. この蔵は校倉(あぜくら)造りで8坪弱, 入口には錠を保護する鞘扉(さやとびら)がついている. 4) 校木の断面は平たく宝庫より時代が下ることがわかる. 5) 朝の宝庫.

宝　　　　　庫

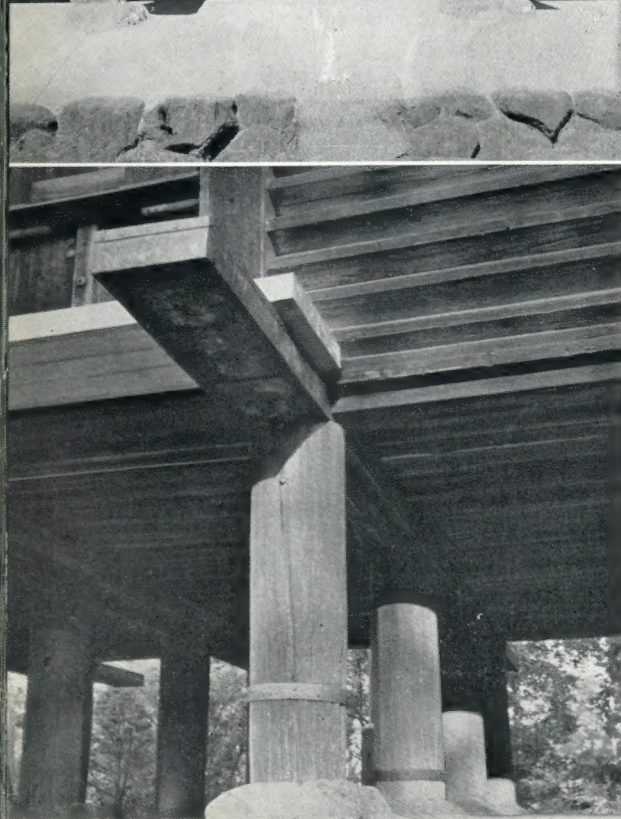
↑

宝庫．正面（桁行）は18間（約33 m），奥行（梁間）は5間（約9.1 m）．簡素ではあるが重厚，氣高さを感じさせる．向って右から北倉，中倉，南倉といい，内部は2階，屋根裏を入れると3階になる．扉の前の横長い箱の中には，勅封をほどこした錠がある．

北倉の位置からみた床下．自然石の礎石の上に立つ丸柱は直径2尺余．南北10本，東西4本，全40本が8尺の上に床を支える．→

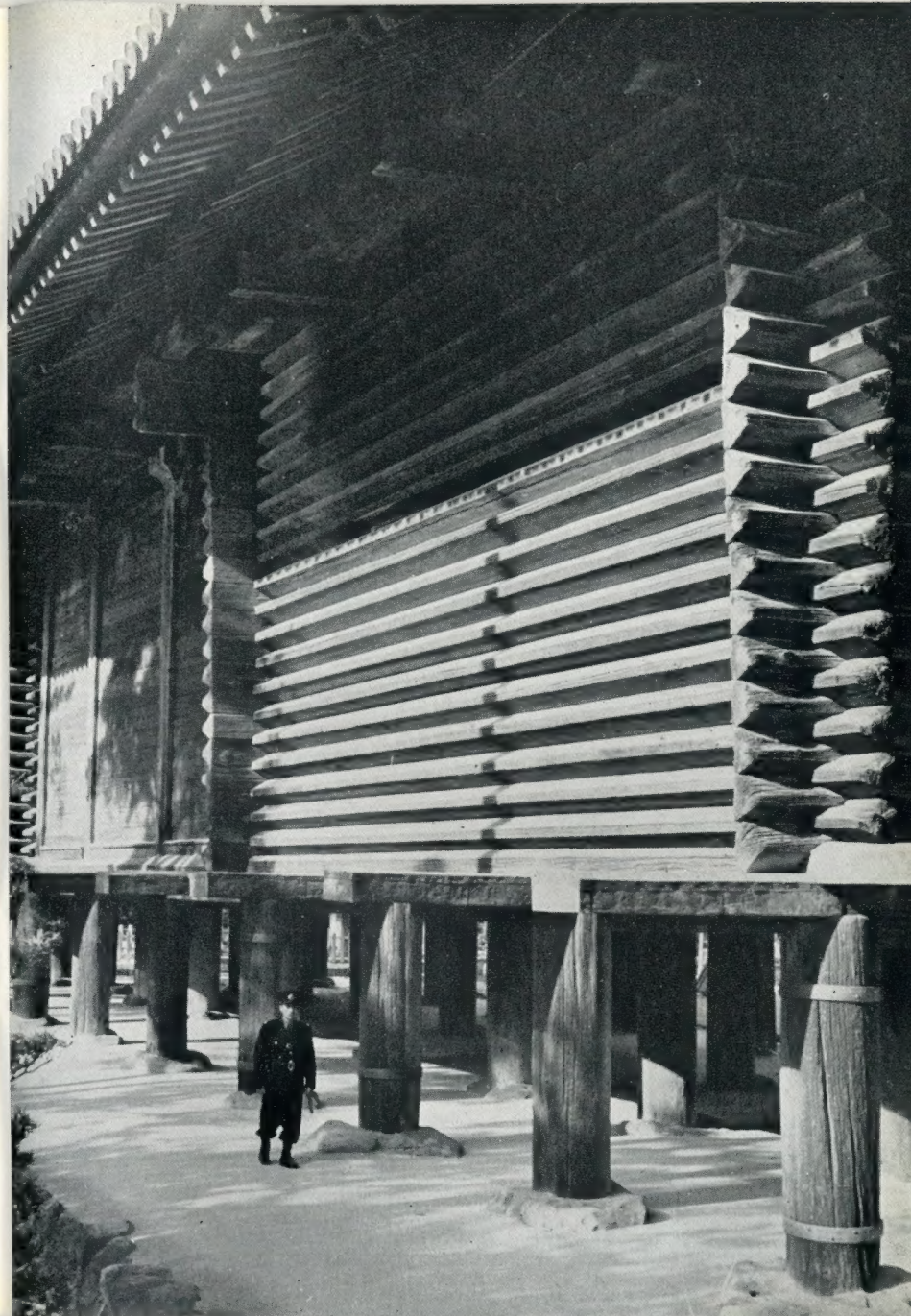
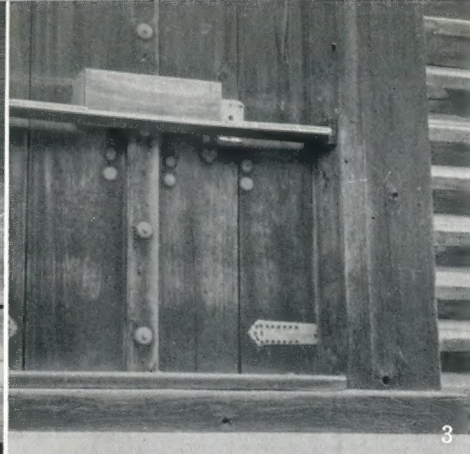
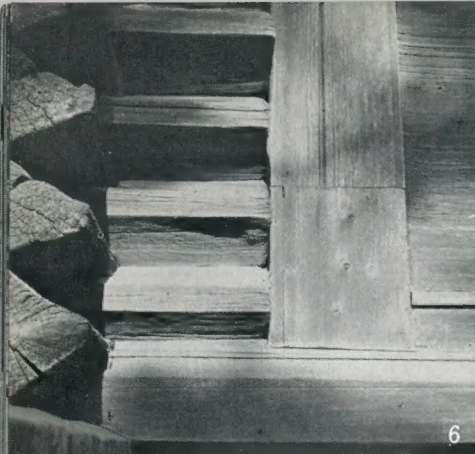
← 手前が南倉．南倉と北倉は三角材を井籠（せいろう）に組み上げた校倉造りであるが，中倉の正面と背面は厚板を柱の溝に落しこんだ板倉式．

宝　　　　　庫

宝庫西側（背面）．手前は → 南倉．倉の西と南との面は，強い風雨をうけて風化がとくに著しい．床下の丸柱や校木の端にそれがみえる．南倉の南面の西へ出ている校木の端に白くみえるのは，戦時中からこの辺りに多くなったムササビがかじった痕．

↖

宝庫東側（正面）．中倉と南倉．中倉は宝庫の創建の初めにはなくて，後から継ぎたしたものという説がある．その根拠として，北倉と中倉，南倉と中倉の桁のつぎ手が，普通なら床柱の上にくるのに，柱と柱の中間にあることなどがいわれている．その反対説は，三倉を通じて，南北の柱すじがよく通っていること，はじめ中倉がなかったとすれば，外側の梁に肘木(ひじき)があるように，中倉の内側に出ている北倉，南倉の梁にも肘木があったはずなのに，その痕跡もないことなどの上に立っている．

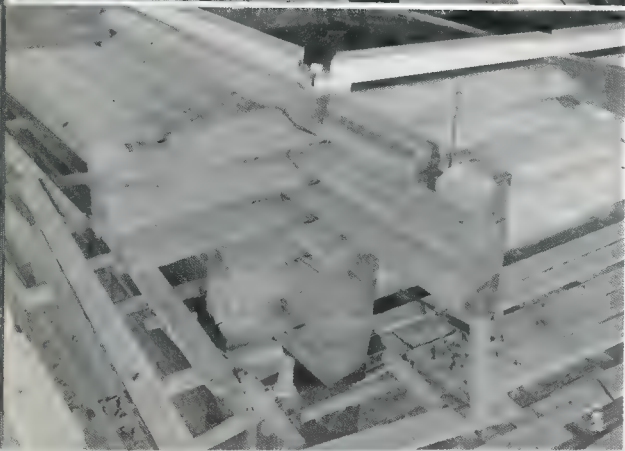
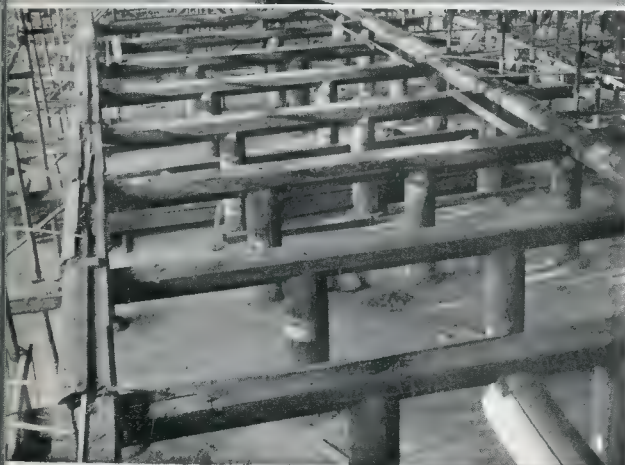
←

柱の鉄輪，桁を包む銅板は後世の補強．宝庫の用材はアスナロといわれる．

宝　庫

1) 隅木は何の飾りもないが4本重ねが珍らしい. 2) 大斗，肘木，丸い軒桁は奈良朝の特色を示す. 3) 扉の下半分，入口の柱下方の木に白くみえるのは‘曝涼’の時に倉に出入する人々の衣ずれの痕である. 4) 三角形の1辺が1尺余もある大きな校木. 垂直に使った面は平であるが，他の2辺には少しシャクリがみえる. 6) 平安朝以後すでに幾度も修補されているので，その跡がみられる. 5),7) 長い間にうけた風化のあとは，中倉の外壁にもっともよく残り，烈しいところは1寸以上も減っている. 8) 建長6年(1254)，北倉に落雷があり，今もわずかではあるが内部に焼け痕がみとめられる. その時の火は龍神が消したという傳説が残っている. この杉本神社はいつから祀られたかわからないが，社前の大杉は神木として枝を切る事さえ恐れられている.

1

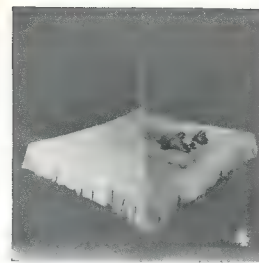
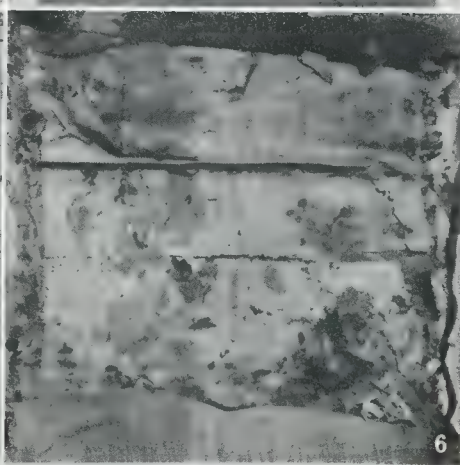
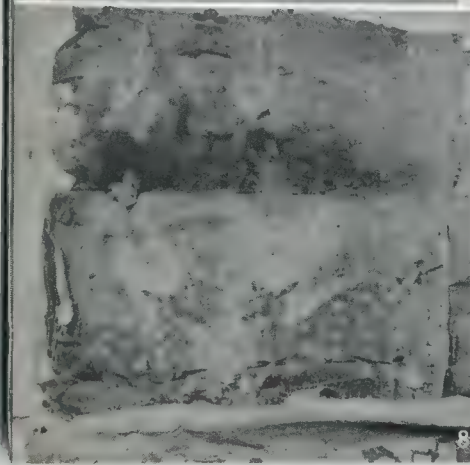
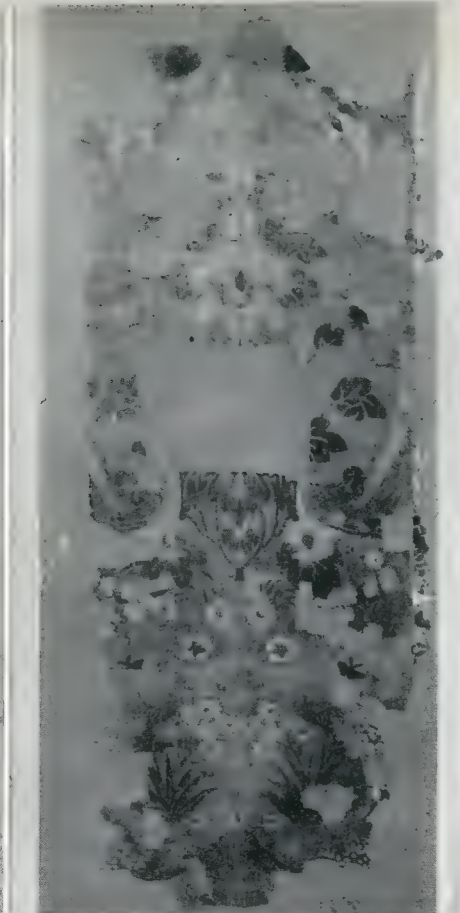
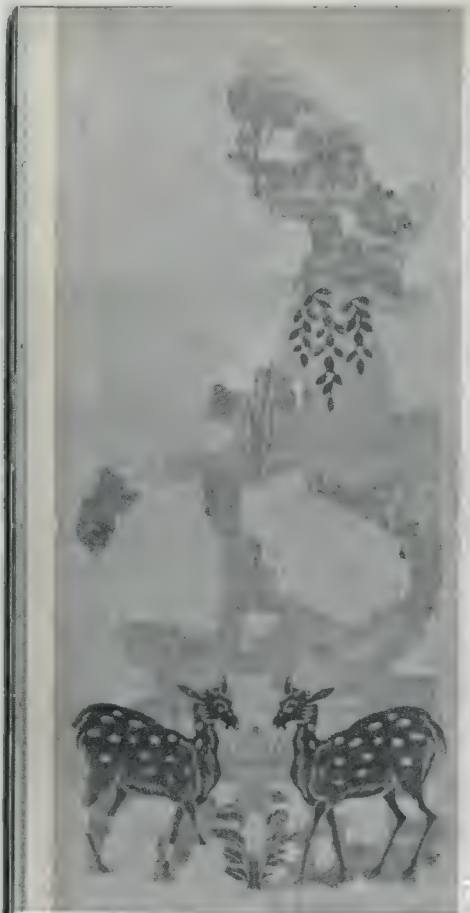
2

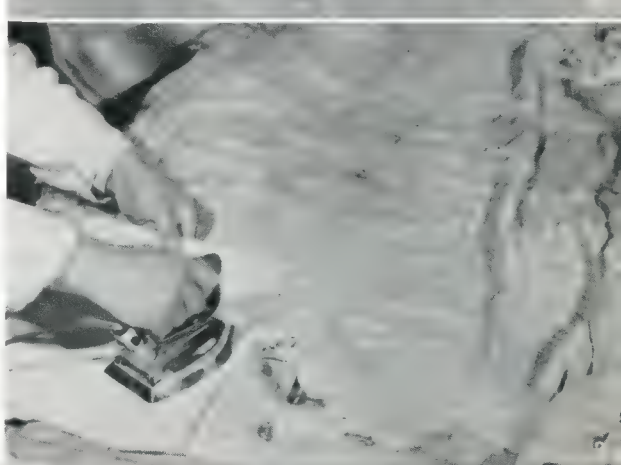
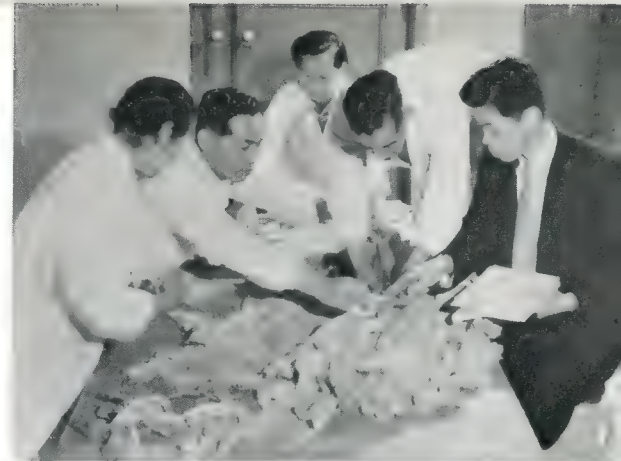
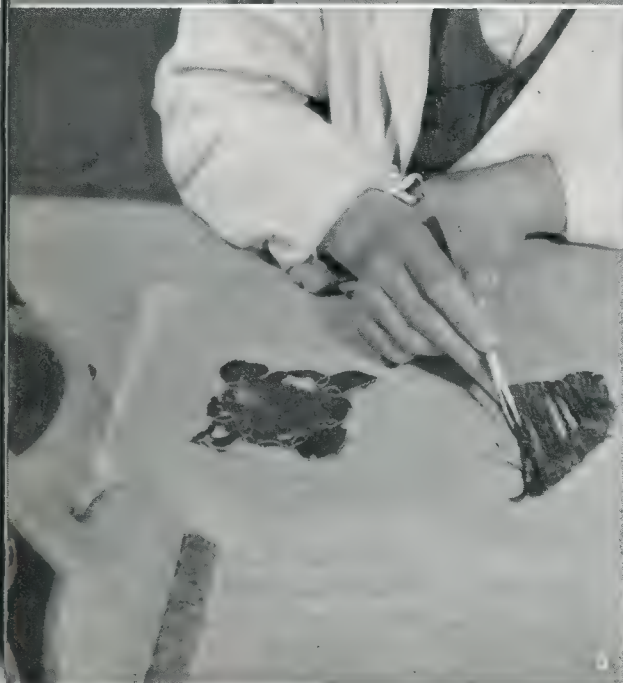
宝庫の構造

1) 明治5年ごろの宝庫．塀もなんにもない．道を手前の方へ進むと知足院に出る．右の大杉は杉本神社の神木である．これは当時，正倉院の調査に当った京都の蜷川式胤の日記に貼ってあったもの．2) 修理前の宝庫．大正2年に宝庫は解体修理せられたが，修理前は軒が下ったのを，多くの支柱で支えているが，南倉の軒先は，波を打っている．3) 小屋組．屋根をとり除いたところで，小屋組がよくわかる．修理の時宝庫を丈夫にするために小屋組が変えられたのでこの写眞はもとの状態をうかがう貴重な写眞である．4) 床板を取り除いたところ．盤木などの架構のしかたがよくわかる．5) 校木の組み手．再び組み立てるときの写眞で校木の組みかたや，梁などのようすがうかがえる．

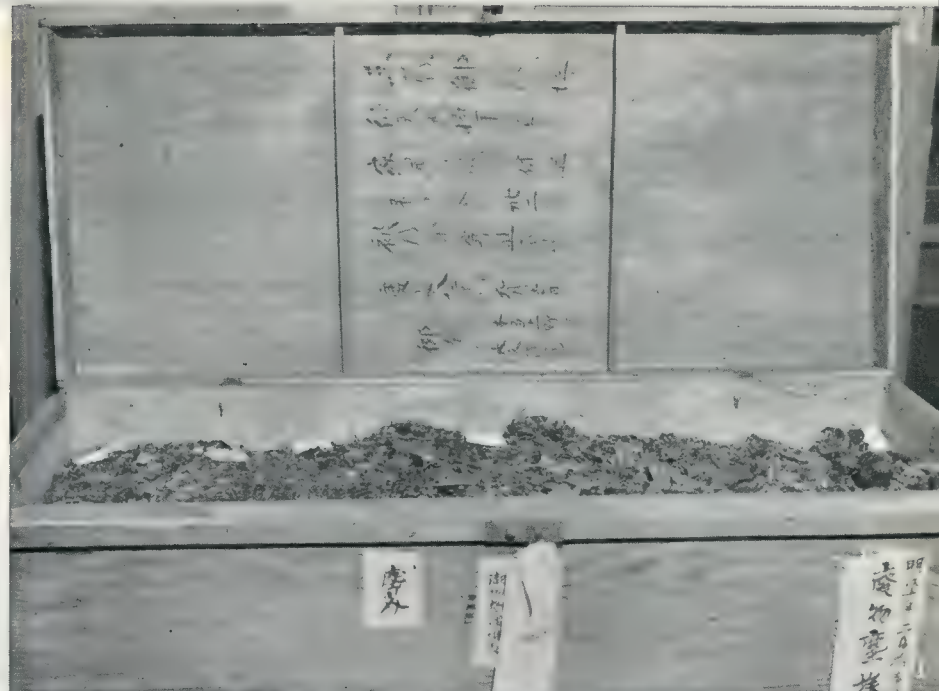
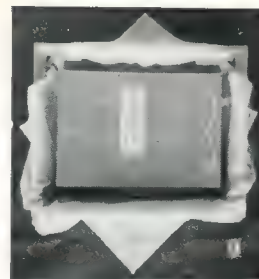
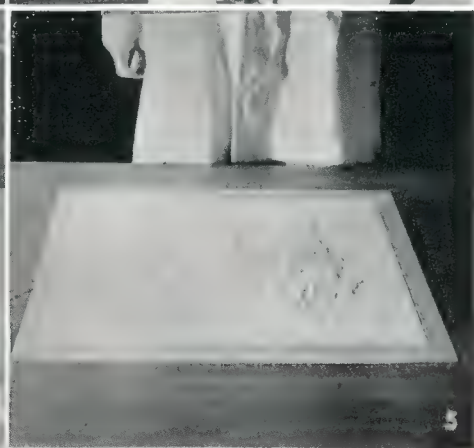
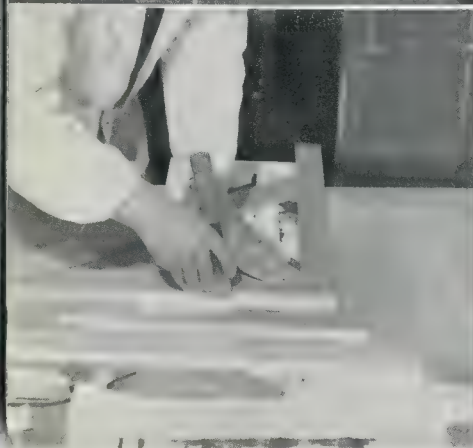
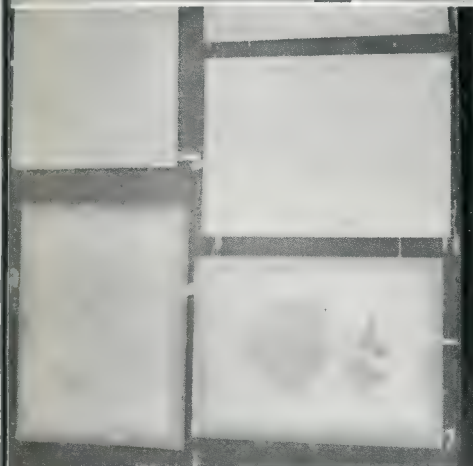
整理と保存

長い年月の流れに抗しがたく、おのずと損傷をきたした正倉院の品々の、修理をはかる事業は、古くは徳川時代前期に始まっている。慶長、元禄に宝庫の修理、宝物保存のための辛櫃（長持）製作など行われ、宝物そのものの修理事業のはじめといえる鳥毛屛風などの修理も元禄になされている。これらはなお、正倉院の宝物的価値の上にそそがれた努力であったが、下って天保四年（一八三三）考証学の発達に刺戟されて古文書の整理が実行されたことは、正倉院整理事業の先駆をなすもので、正倉院の宝物的価値のほかに、学術的価値の発見として、特筆されるべきことであろう。曝涼展覧主義を一時止めても、整理、修理を中心にした正倉院の「發掘」が本格的にはじめられねばならぬとされ、実行にかかったのは、明治二十五年からであった。この時から、金銀平脱鏡や紺瑠璃杯の金具の修理が加えられるほか、衣類などの繊維品は分類して、完好品、残闕、断爛（形状のとらえようがないもの）、塵芥（断爛中の細片）、塵粉（塵芥をふるった粉）の五つの別が立てられた。宝物の模造にも力がそそがれた。さらに大正三年からは古裂の整理が始まり、大は二十七尺に及ぶ幡から、小は寸にみたない断片まで、十万点が整理され、世界に現存する貴重な唐代の裂類の大部分を占めている。こうして苦心整理されてきた正倉院裂もまだ半ばにすぎない。宝庫は実に無限である。

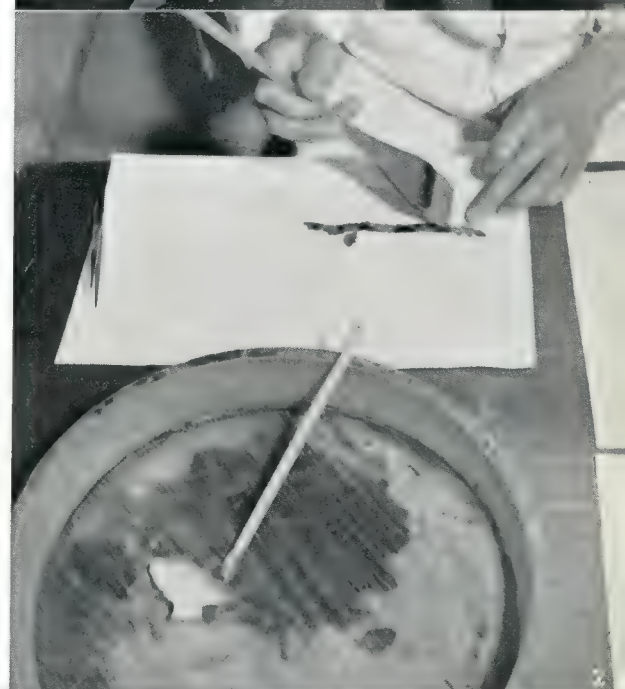
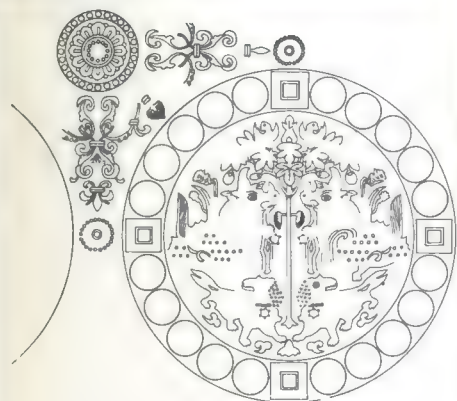
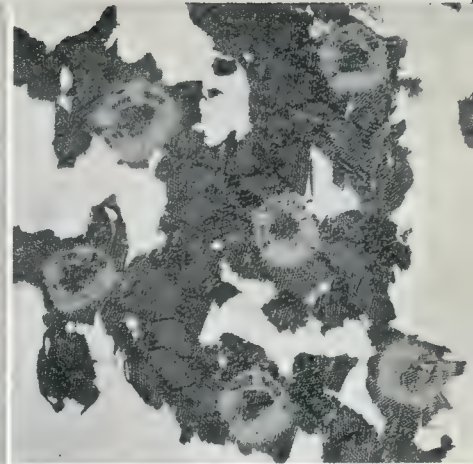
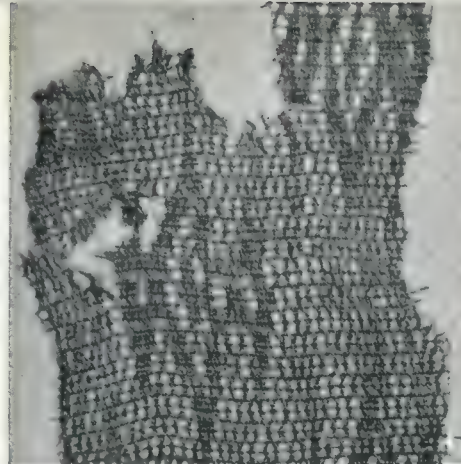
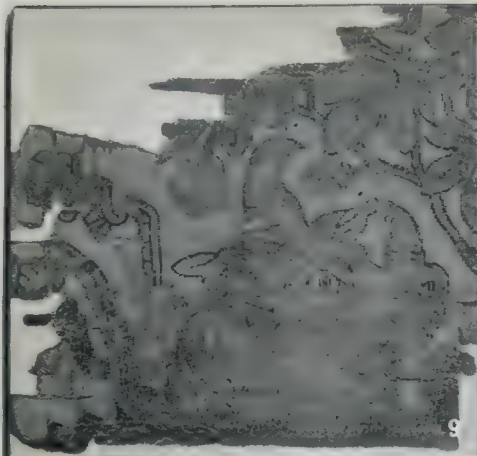
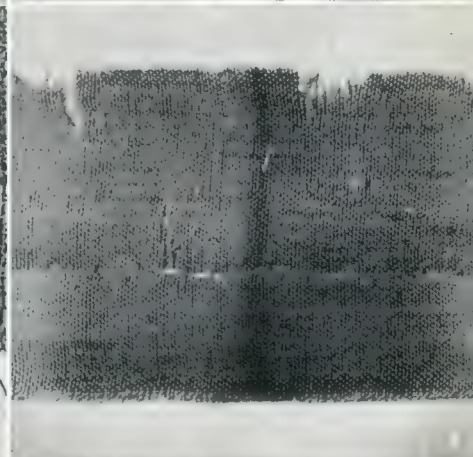
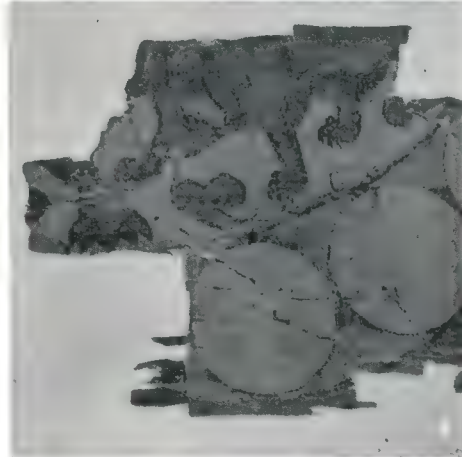
仮　　宝　　庫

1）仮宝庫には未整理品や，整理，修理された裂地類などが辛櫃や箱に収められている．これから整理するものを，仮宝庫から持ち出す時は，一應点検したうえ，軽い荷造りをする．2）未整理品を入れた辛櫃．3）和櫃は辛櫃と違って，脚がなくて底が床につくが，性能はかわらない．4）仮宝庫の内部．未整理品の詰った天平の櫃．新しい箱は整理済品の容器．5）未整理品といっても，一應，仕分けされ，包装されて櫃に収められている．

天蓋の修理　屏風の復元

1）仮宝庫から持ち出された天蓋．修理に着手する前に拡げて，修理の箇所，その方法などが研究しながらきめられる．2）穴はその大きさに合せて切った和紙を貼ってふさぎ，弱いところを補強する．紙にも糊にも防虫剤が入っている．3）補強が出來た箇所は，アイロンをかけて仕上げをする．ほころびは，古い縫目をたどって繕う．4）出來上った天蓋．内側の四隅には天蓋を張る骨を受ける小さい袋がついている．天辺には吊り紐を通す穴がある．天蓋は貴人にさしかけたり，佛像の上部に吊すもの．5）と 6）は草木屛風，7）と 8）は鹿屛風で修理前の状態と修理完成とを比較したもの．いずれも数 100 片の裂を集めて，新しい裂に象嵌式に貼って作られたもの．

裂地の整理

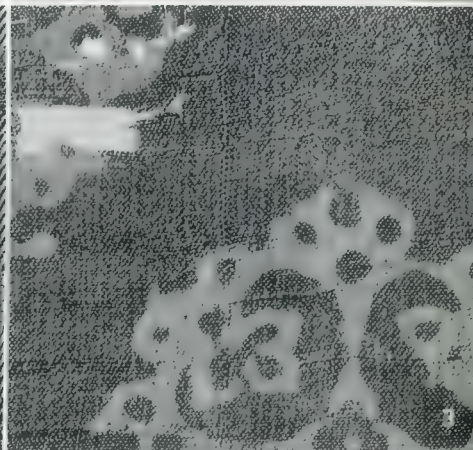
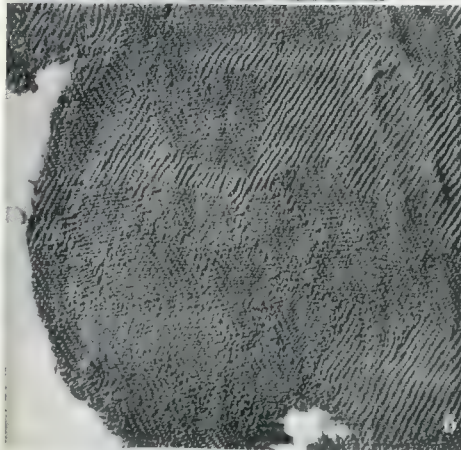
1) 錦，綾，絁，布(麻)などの小断片が入っている櫃．この小断片は塵芥といわれている．2) 塵芥の中には裂の他に，薬や眞珠，破玉，器物の断片などもまじっている．ピンセットの先に光ってみえるのは，錦の小断片の先について出てきた，幾つかの眞珠．3) 櫃から小さい箱に取り分けてきた塵芥は，正倉院事務所の修理室で，種類別にわけられ，いろいろの工程を経て，古裂帖に仕上げられる．4) 取出した裂に，水を与えて，糸目を整えると模様が出てくる．5) 水伸しして，糸目をそろえたものは，この水張りのままかわかす．

裂 地 の 整 理

1) 水伸しが乾けば，台紙ごと切り抜き，裂地の種類別に分類し，枠の入った紙に配列する．2) 配列のきまった裂には表側から糊をつける．3) その上から，本張りの紙を静に当てて，押えつける．4) 本張りの紙を裏返して，水張りのときの台紙を静に剥ぎとる．5)，6)，7) 本張りが乾けば補強のために裏打ちをする．8) 裏打ちが乾くと剥がして，古裂帖の大きさに截断する．9) これを帖に製本し，箱に収める．帖装（じょうそう）という．裏表紙には，その帖に貼ってある裂数（きれすう）と，帖の番号を記入して，台帳と連絡する．

10

裂　地　の　種　類

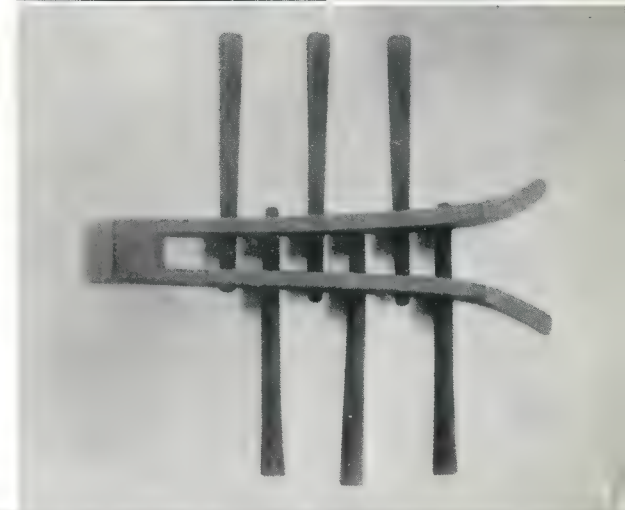
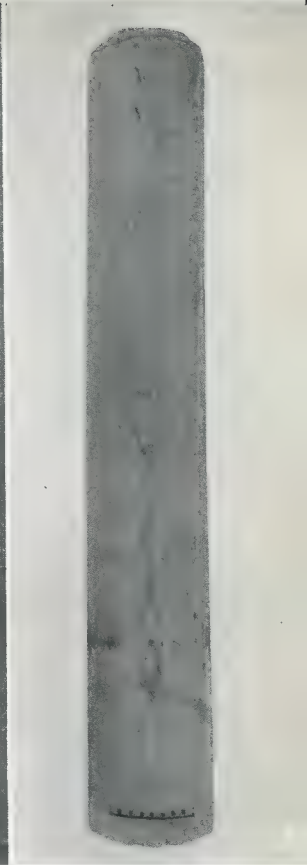
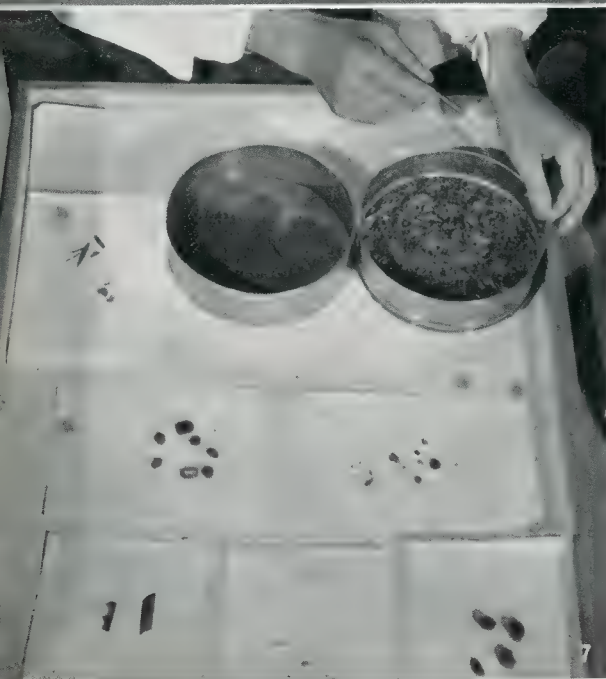
古裂帖の裂地．1)　絞纈綾．絞纈は今いう絞りのことである．2)　夾纈．板締のこと．文様を彫った板に，裂を二つに折って挟んで染めたり，または單に裂を疊んで板で締めて染めたもの．3)　臈纈の絁．臈纈は蠟染めのこと．絁は平織の絹で上等でないもの．文様は型を使ったものがある．4)　羅一種の薄物で，経が千鳥にからみ合って地紋が織り出される．5)　錦．二種以上の色糸で織ったものを錦という　6)　綾．一色の糸で地紋を織り出したものを綾といっている．地の糸の方向と，文様の糸の方向とが反対になっているものを，綾地綾という．

犀　文　錦　の　復　元

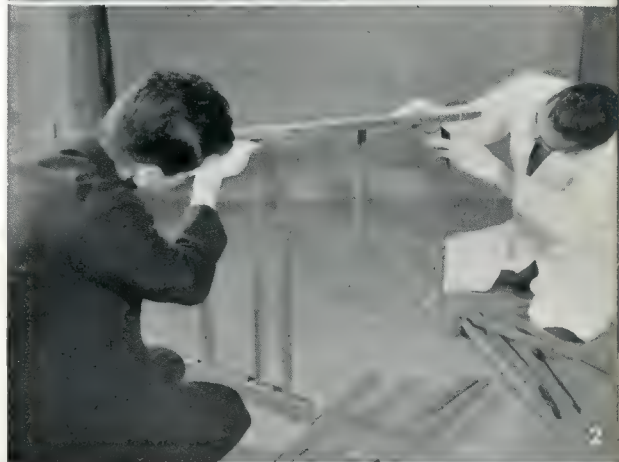
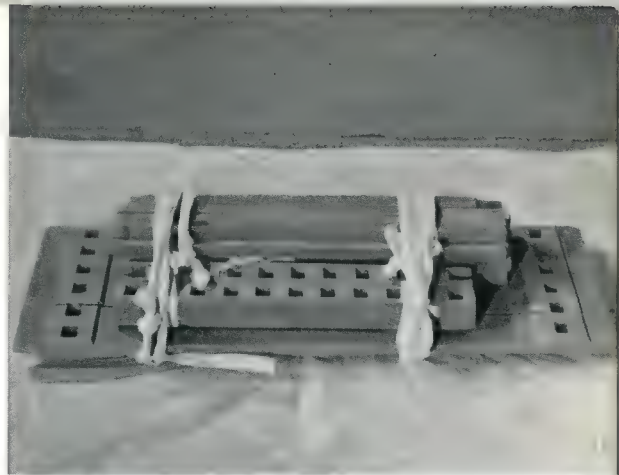
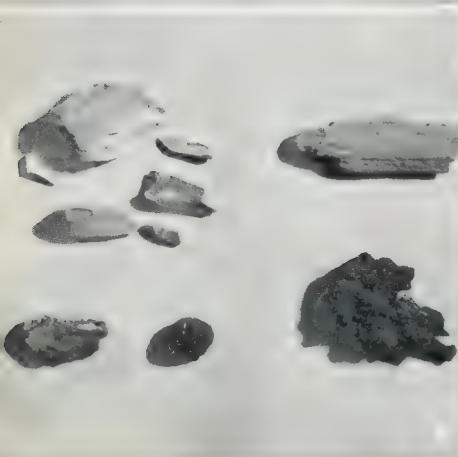
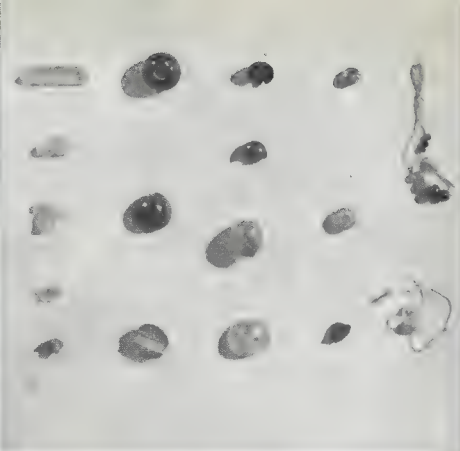
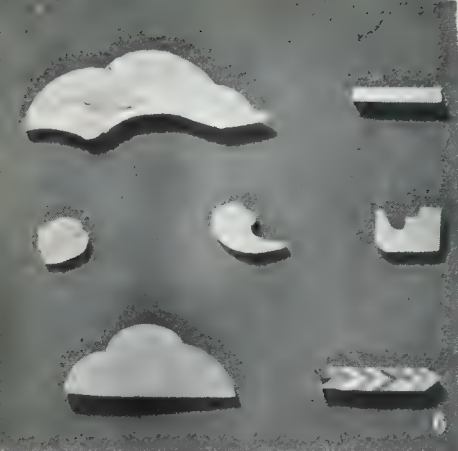
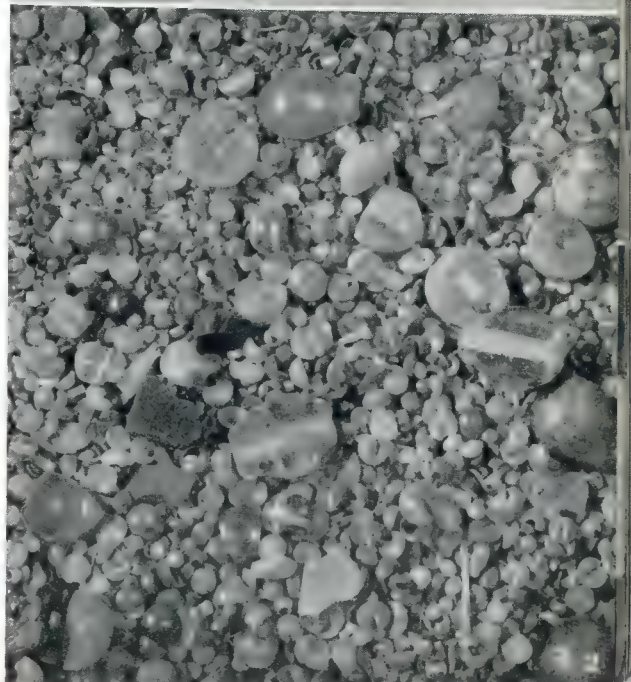
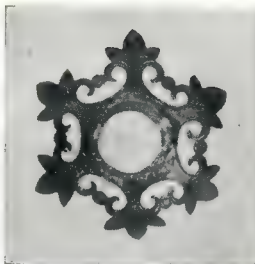
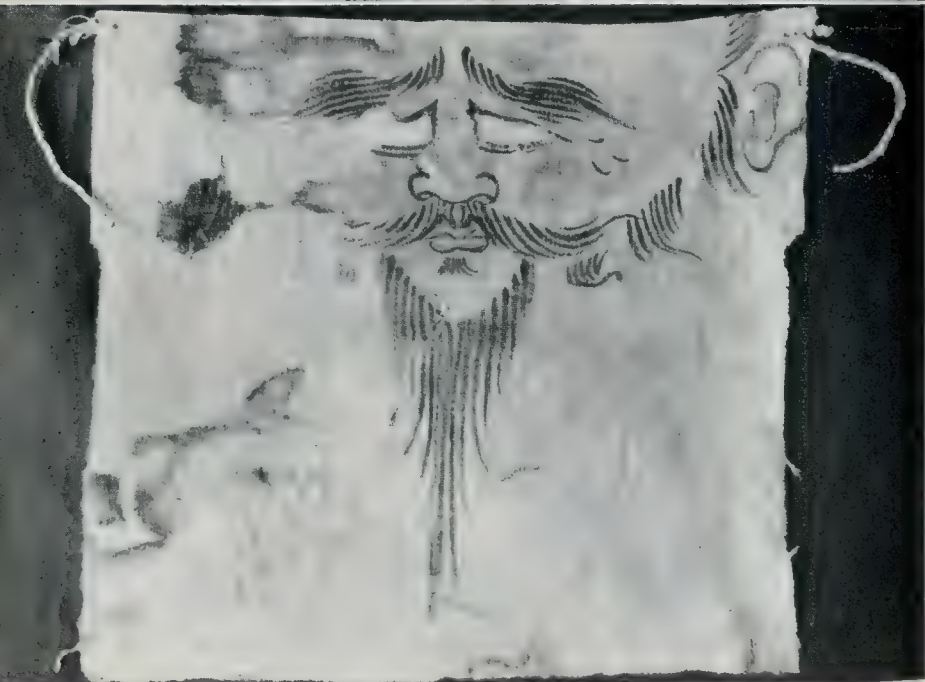
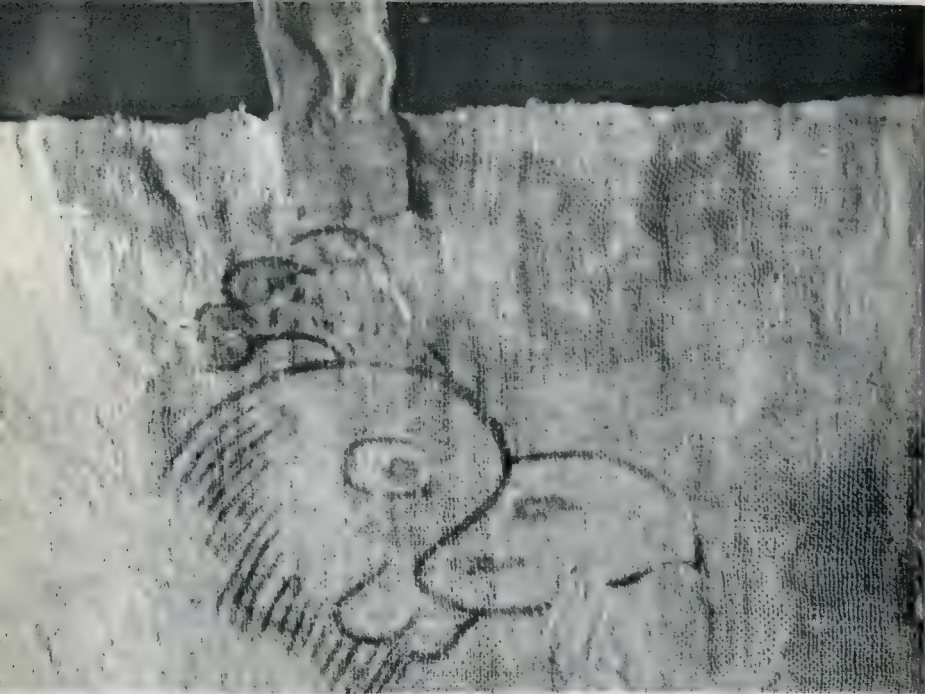
7)　裂の復元．同種の裂を集めて文様を復元することは，裂の整理の理想である．8)，9)と共に古裂帖に貼ってあるもの．現在もその断片が発見されていて，これを集めてみるとだいたい(10)の復元図のようになり，りっぱなペルシア系の連璧文錦になる．

樂器の復元

裂の復元をする一方，樂器類の復元模造もされている．1）は七絃の琴形樂器の残闕．この裏板にある撥形の跡が，樂器残闕中の七絃樂器の頭部（3）と，ぴったりと合ったので，2）のような復元模型がつくられた．これは琴の一変形ではないかという説もあるが，絃を通す穴が弧を描いており，絃の長さを等しくする工夫がほどこされてあるので，特別の用途を想定させるところから，樂器の調律に使う‘準’に比定する説もある．5)は箜篌の現状（残闕）で，和名では百済琴という．この箱には二張入っている．4)はこの箜篌の復元模造．

几　の　修　理

4）は二十二足几．几とは机のこと．裂地の整理と同じように，木工品の修理や整理もすすめられる．1）は仮宝庫内から取出してきた几，これから組立てて原型に近い形にした上で，破損箇所や不足部分を調査し，もとの形にもどすための修理作業の方針が立てられる．2）この几は，四隅の脚だけが上の板の表面まで出ていて，あとの脚は板の裏面にくり開けた穴にはめこみになっている．まず四隅の脚をしっかりとはめこみ，つぎに残った脚を順次に加減をみながら差しこむ（3）．各々の脚は，長さ太さがごく少しではあるが，ちがっているため，だいたい穴の大きさと脚の加減とによって入る位置が定められる．4）は組立終った几．この組立作業によって，修理，補足する箇所がわかった．

夾　雑　物

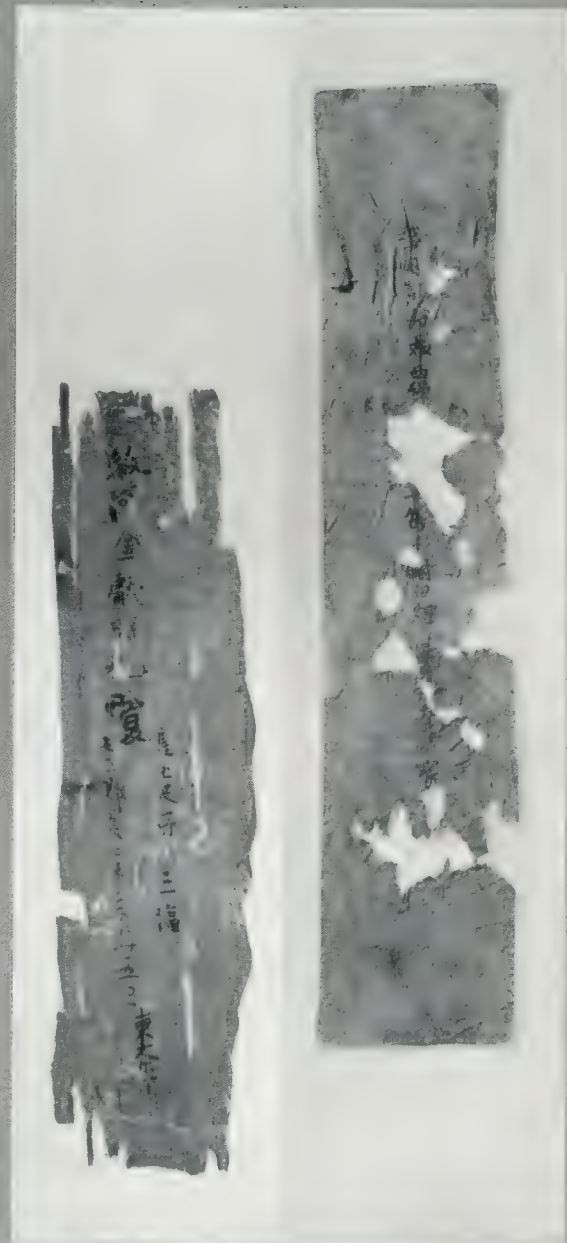
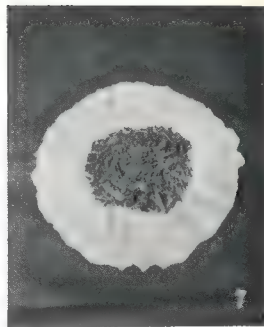
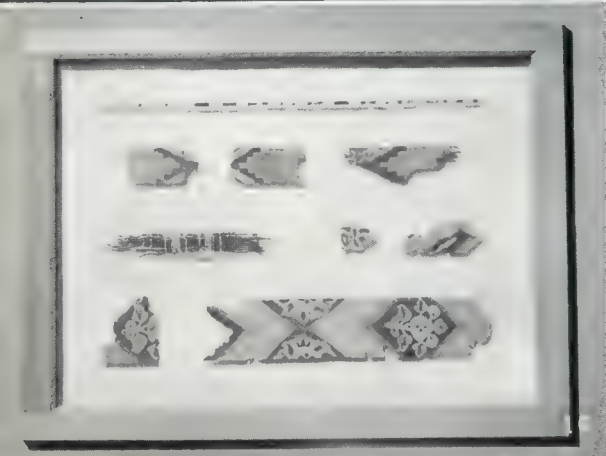
6）　裂の塵芥の細い部分．塵粉，薬などをふるいにかけてみると，いろいろなものが見出され，宝庫にある品の部分，失われていたと思う薬なども出てくる．これは裂地の塵芥をふるっているところ．ふるいをかけると非常にほこりがたつので，最近は蓋つきのふるいを用いているが，ここで使っているのは代用で，元來は薬をふるうためのもの．7）　ふるいをあけてみると，案外多くの夾雑物が残っている．ふるいの前に置いてある白い紙の上には，ふるった毎に出てくる夾雑物を大体種類別に分けて，一應整理してある．5）　ふるいにかけて出て來たいろいろの夾雑物は，種類別に分類し整理箪笥に収められる．これは整理箪笥の抽出しの部分．左上は箜篌の軫，右端は奈良朝の神功開宝．

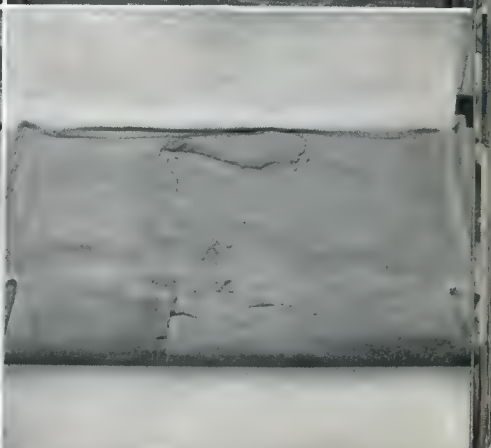
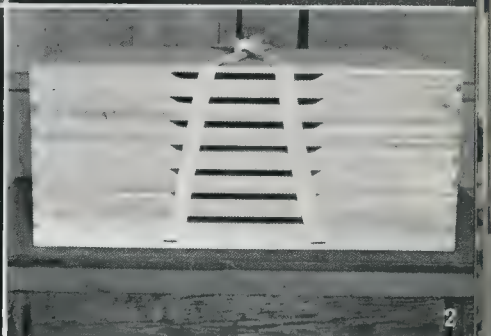
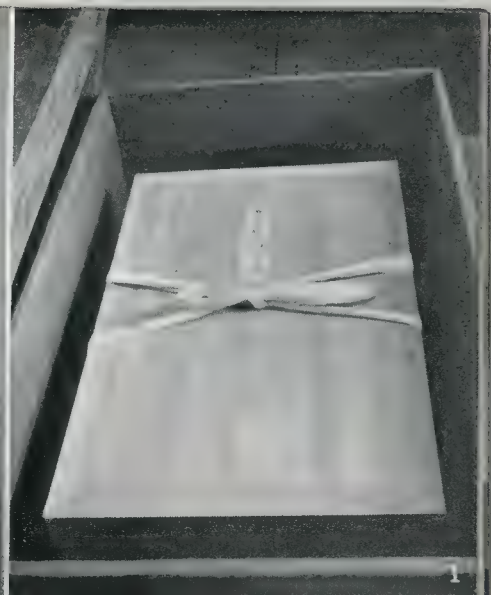
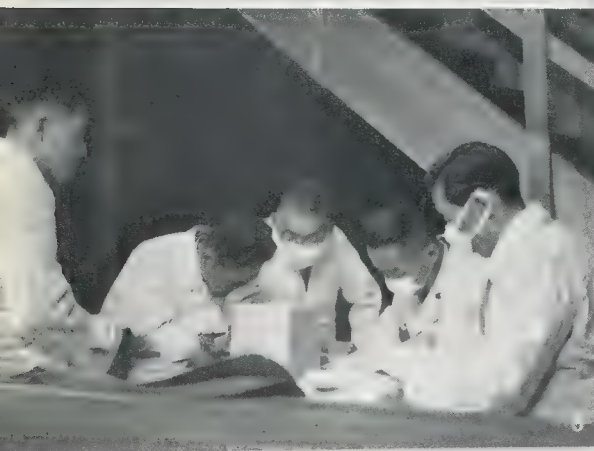
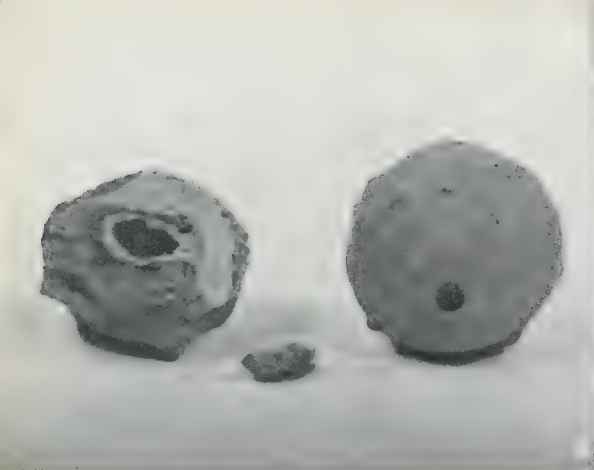
夾　雑　物

1）ふるいの目から落ちた粉，塵粉とよばれている．塵粉はガラス壜に詰めて整理されている．2）これはふるいによって見出されたものではないが破れたガラス玉などを集めたもので，ガラスとして整理を待っている．重さは約 40kg もあろうか．3）塵芥から見出された眞珠飾り（右端下）とガラスの小玉と水晶原石（左端）．4）上は紙に金箔を貼った花形飾り．下は銀平脱（へいだつ）の鳥形．5）飾り金具と竹の鏃（やじり）．鏃は宝庫にある矢に附くものと思われる．6）剝落した螺鈿（らでん）の貝，木画片（右下）．木画というのは，象牙，角，木，竹の細片で文様を作るものをいう．一種の寄木細工ともいえよう．7）金絵の箱縁（上）と璽襆の絃止（いとどめ）（三列左）．8）龍骨（右上）と紫鉱（右下）．龍骨は，象の化石で，解熱剤．紫鉱は北インドなどに産するラック貝殻虫の分泌物で，染料および塗料の原料になる．

日　々　発　見

➡ 右は調(みつぎ)の附紙．越中國から出した調物(みつぎもの)につけた紙で，越中の國印が押してある．調物を出す形式として初めて見る資料である．左は机覆(きおおい)の断片．天平勝宝２年（750）駿河國で金を発見し，大佛に献上した時の机覆の断片であることが墨書で分った．

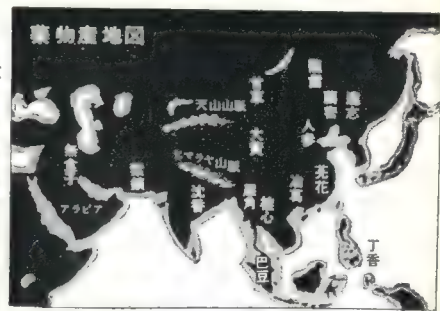
⬆ 紺瑠璃坏（p54参照）の金具．これらは裂の中より見出されたものである．

⬉ 布幕(ふまく)残片．裂地整理の時最近発見したもの，十二支を描いた幕の一片．作例の少い奈良朝の絵画に新しい資料を加えたもの．

⬅ 布作面(ふさくめん)．麻で作った舞楽のマスク．これも最近の発見である．同類のものが二十面ほど，一度に出てきたのを修理したもの．

保　存

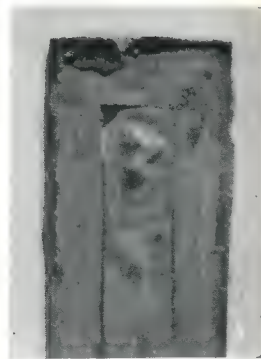
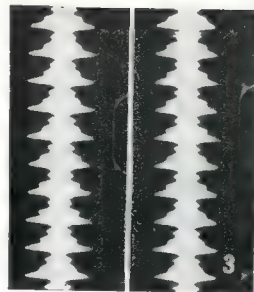
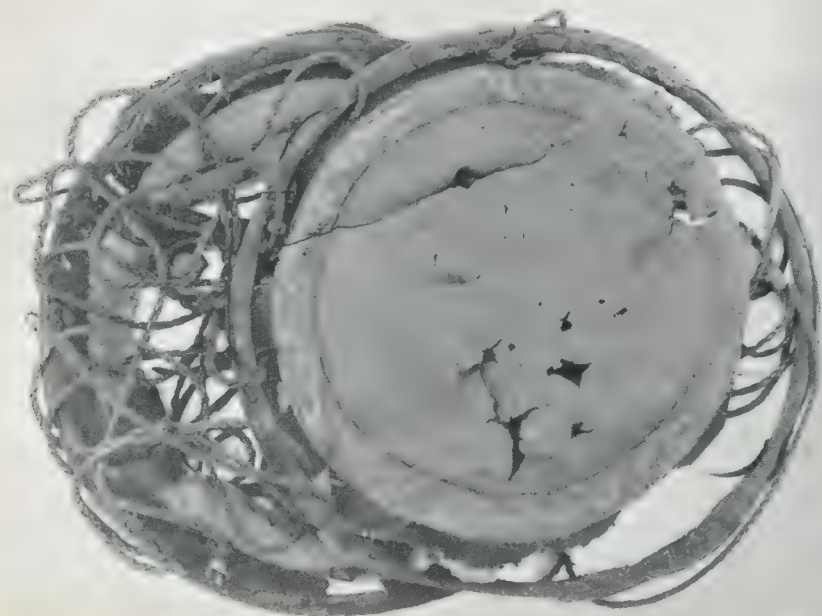
仮宝庫内の御物の保存や整理には，特別の注意がはらわれる．1)，2)，3)は東大寺造営の時の銅工の作業衣が箱に収められ，古い辛櫃を利用して整理されている．4)は大型の裂を屏風に張り，箱に入れたもの（屏装）て，その抽出しには防虫剤を入れ，又屏風の骨の間にも丁子が入っている．5)は長い裂を巻いて保存する巻装て，簞笥に収める．6)は畳むことの出來ない長い大きな幡を入れた籠．8)は防虫剤て，右から甘松香，丁子，白檀，沈香．9)は防虫剤の包．上段はエビ香（沈香丁子等の混合香）．右端は奈良朝式の包み方．下段は樟脳．7)はエビ香を開いたところ．10)はガラス挟み．両面をみるための整理方法は玻璃装という．

薬　　物

1)　黄熟香．沈香の一種．世に蘭奢待として知られている．蘭奢待は東大寺をもじった文字ともいわれている．附いている札は，右から足利義政，織田信長，明治天皇の截香の跡を物語っている．2) 薬壺．薬は陶器の壺，錫の壺，木の蓋物，布帛袋などで辛櫃に入れられて保存せられた．3),4) 無食子と無食蜂．北インドからイランにかけて産し無食子は無食蜂の作ったもの．3) の右側にみえる穴は，蜂が出た跡．左側は薬を割って中の蜂を出したところ．4) は蜂の拡大．現在イラン方面にいる無食蜂と，全く同じだということがわかった．これは下痢止に用いられる．5)は北倉の入口で，薬物を調査する人々．

P42, 43, 44. 写眞薬物調査團提供

調査と研究

宝庫の調査は、けっして派手な仕事ではない。修理、整理の仕事と互におぎないあいながら、きれぎれなものの形態を理解し、亡びたものを再現し、一つの文様、一つの文字、記文の発見を喜びとしつつ日ごとに「発掘」されたものを科学的に系統だててゆく努力が続けられる。それは考古学の分野だけでなく、歴史学、國語学、美術史等のあらゆる分野にわたって多くの貢献をしたが、それ故にこそ詳細でしかも総合的な研究が必要となる。

したがって、昭和廿三年から取上げられた、薬物、樂器の調査のごときも、この総合的研究という見地から、ただ医学、音樂の歴史だけの分野にかぎられた資料の発見を目的とするだけでなく、学問藝術の全般にわたって重い責任をになっている。そのためには、東西の薬学者を中心に史学、化学、化石学の学者が協力して薬物調査をつづけ、その実体を究明し、今までの解釈や言い傳えを訂正し、亡失したものを発見し、その上、有効成分の有無をしらべ、その產地をたずねて東西交通の歴史をも跡づけるところまでやっている。樂器調査も、音樂史家、演奏家に、物理学、化学の権威者が協力し、管樂器と打樂器の形態、構造を精査し、音律を調べうるものはモノコードを用いて調査、錄音するなど、將來の研究にも備え、古文献の樂器や演奏の記述もこの研究で証明されまた補足される。また金工品や「密陀絵」の調査も始まり、宝物の材質も究明され、こうしてまだ糸口とはいえ宝物の科学的研究は前進しつつある。

藥　物
樂　器

2）は遠志．北支，蒙古などに野生するイトヒメハギの根．この束ね方は現在中國で，貴重藥に用いられ，この遠志が上等品であることを示す．祛痰剤．4）は大黄の表面拡大．大黄の最上品の特色である錦紋がよくわかる．緩下剤．3）は芒消の拡大．その成分は含水硫酸マグネシウム（瀉利塩）で，いまの芒消と異なる．1）は芒消の入っていた袋．芒消が附着しているし，「芒消…斤」と墨書してあるのが，かすかにみえる．樂器の調査研究もなされている．6）は笙と竽，竽（左）は笙の大なるもの，共に17管．長い吹口もつく．5）は簧，音調節の錘りをつけることも，今と変らない．

楽　　　器

1）は簫の残闕．ハーモニカのように奏するもの．2）は尺八と横笛（表と裏）．尺八は今のものより一孔多い．吹奏してみて二つとも一定の音組織をもっていることがわかった．3)は刻彫尺八の角の音波形．振動数 615～（笛の基音“徴”358～の1.71 倍すなわち約$\frac{5}{3}$倍にあたる）．指使いは裏孔（1）をふさぎ，表孔 2，3，4，5，6 はひらく．5)は磁鼓胴．三彩の鼓胴として珍しい．唐樂に用いる二鼓であろう．4）は腰鼓．木をえぐって漆がかけてある．伎樂の用具で 22 個もある．6）は鼓皮の残闕．皮は犬といわれ，輪は鉄，緒は緋色．

波形　田口卯三郎氏提供

その歴史

孝謙天皇に譲位され、太上天皇であられた聖武天皇がおかくれになったのは、天平勝宝八歳五月（七五六年）のことであった。天皇御在位中から、大慈大悲の國母といわれ、文化史上にも多くの仕事を残された光明皇后は、悲しみのお心をなぐさめるよすがにもと、御遺物を東大寺の盧舎那佛に献じられることを思い立たれた。いうまでもなく、この大佛は聖武天皇の一代の全靈を打ちこめて創建された総國分寺の本尊である。御遺物を身近くおかれ、お目にふれるごとに悲嘆をくりかえされるより寺の宝物として永久に保存をはかろうとされたのであろう。皇太后は親しく祈願文をつくり、先帝の七々忌にあたる六月二十一日御遺愛の重器その他六百点をこえる品々に、薬物六十種をそえて、盧舎那佛に奉献された。東大寺献物帳（國家珍宝帳・種々薬帳）はその時のものである。

御遺物奉献が 個人的色彩に富むのに対し、薬物奉献は社会救済の目的をもち、併せて先帝御回向の意味をも含むのであろう。事実、この薬物は、病苦に悩む者に服用を許すことが明記されており、しばしば施薬院に賜っている記録（桂心請文）もある。同じ年の七月、さらに屏風、花氈などの追加献納があり、翌年には人勝（正月の祝物）など、翌々年にはやはり御遺愛品の残りとして王羲之・王献之父子の書一巻（大小王眞蹟帳）の奉納がつづいた。またその年、光明皇后の父藤原不比等の書を貼った屏風も奉献されている。これまでの奉納品が、総称して本來の正倉院御物であるが、また後代になって納められた物がある。村上天皇の天暦四年（九五〇）、綱封藏（國の佛教法務を司る僧綱の封をつけた藏）であった東大寺羂索院の双倉が朽ちたため、その納物を正倉院の南倉に移した。現在、正倉院にのこる宝物の中には、本來の「御物」、すなわち五種の献物帳に列挙されている「帳内御物」のほかに、天平勝宝四年四月九日の大佛開眼会の用具と奉納品、同じ五年三月二十九日の仁王会（仁王経を講じて國家安泰を祈る法要）の用具と奉納品、聖武天皇の御生母や、天皇の御一周忌のような皇室関係の法要の用具、称徳天皇（孝謙天皇が二度目に皇位につかれた時のおくり名）東大寺行幸の時の奉献品、造東大寺司（東大寺造営の役所）の用品、古文書、その他、朝廷の行事に用いられた用具などがあるが、これら多数の宝物は、主として羂索院双倉からの移納であろうとされている。もし試みに、このように間接に正倉院に入って來たものの故郷をたずねてみるなら、東大寺の阿彌陀堂、薬師堂、羂索院、千手堂、吉祥堂、戒壇堂、小塔などが追求できるのであって、大佛殿、造東大寺司、東大寺写経所のものは、やはり羂索院に収めてあったものかもしれない。正倉院の宝物の由緒と來歴は、かように雑多であるが、由緒それ自体が物語るように、品々はほとんど奈良朝の、それも天平を中心に花咲いた文化の遺産ばかりなのである。

↑↓ 扉（南倉）．中央の箱の中に勅封がほどこされている．秋の‘曝涼’の時には，侍従が差遣されて，三倉の扉がひらかれる．

← 國家珍宝帳．天平勝宝八歳（756），皇太后（光明皇后）は聖武天皇の七々忌に相当する６月21日に，天皇の御遺愛の品々を東大寺盧舎那佛に奉献して，御冥福を祈られた．國家珍宝帳はその品々の目録．

奉為　太上天皇捨國家珎寶等
入東大寺願文　皇太后御製
妾聞悠々三界猛火常流沓々五道毒
網是壯所以自在大雄天人師佛垂法
鈎而利物開智鏡而濟世遂使擾々群
生入寂滅之域蠢々品類趣常樂之庭
故有歸依則滅罪无量供養則獲福无
上伏惟
先帝陛下徳合乾坤明並日月崇三寳
而遏悪統四攝而揚休聲籠天竺菩提
僧正涉流沙而遠到化及振旦鑒眞和
上淩滄海而遐來加以天惟薦福神祇呈
祥地不惜珎人民穆聖恒謂千秋萬歳合
歡相保誰期幽塗有阻閲水悲涼靈壽無
增穀林摧落隟駟難駐七々僟來茶襟轉
積酷意弥深披后土而無徴訴皇天而不
先帝翫弄之珎内司供擬之物追感
疇昔觸目崩摧謹以奉獻
盧舍那佛伏願用此善因奉資冥
助早遊十聖普濟三途然後鳴鑾
花蔵之宮住蹕涅槃之岸
天平勝寳八歳六月廿一日
從二位行大納言兼紫微令中衛大将近江守藤原朝臣仲麻呂
從三位行左京大夫兼侍從大倭守藤原朝臣永手
從四位上行紫微少弼兼中衛少将山背守巨萬朝臣福信
紫微大忠正五位下兼行左兵衛率左右馬監賀茂朝臣角足
從五位上行紫微少忠葛木連戸主

奉盧舎那仏種々薬

合六十種　盛漆櫃廿一合

麝香卅劑

犀角三箇

犀角一械

犀角器一口

朴消七斤

小草二斤四両

胡椒三斤九両

阿麻勒九両二分

黒黄連三斤

青葙草一斤

理石五斤七両

大一禹餘粮二斤三両

五色龍骨七斤

蕤核

畢撥三斤

寒水石十八斤八両

菴麻羅十五両

元青一両

白皮九斤

禹餘粮

龍骨

白龍骨

施薬院請物

桂心壹伯斤　東大寺所収者

右件薬為用所盡院

無院裏今欲買用亦無

責人仍請如件

天平寶字三年三月十九日

正倉院の宝物は、当時もすでに「國家の珍宝」であり、宝物的價値が非常に重く考えられていたから、その管理もきわめて厳重であったが、二三の特殊例をのぞいては、実用的利用が拒否されていたのではない。先にあげた薬物の下賜以外にも、珍宝の出蔵して利用された例は、十世紀の初め醍醐天皇の延喜年間まではつづいている（出入帳・雑物出入帳）。勅封という名は、文書や記録の上ではようやく十世紀、十一世紀の交に見えはじめるようであるけれども、物の出し入れに、朝廷派遣のお使が立ち、僧綱、東大寺の役僧、造東大寺司の役人が立会うというのは、はじめからの原則であった。後に造東大寺司がなくなりまた中央政府が弱体化し、正倉院の開閉にも変化がきたが、勅封の方式は厳として動かず、開封にはかならず勅使が特派され前の勅封を持ち帰って、新しい勅封が施されるという儀式がおこなわれた（曝涼帳・御開封図）。そして東大寺は、正倉院がその一部であるとはいえ、いわば勅封の倉をお預りして、それを守護する任にあたっていたのである。その後、皇室のおとろえた間、正倉院も久しくかえりみられず、出蔵した宝物がそのまま還らぬというような遺憾なこともあり、東大寺もいくたびか兵火にかかって、正倉院もその前の三面僧坊の焼け落ちた治承四年のごときはその火間近かにせまりながら、幸いに危険をのがれ、よく千余年の星霜を無事にすごし得たのはまことに幸いであった。いま、正倉院正門から入って白砂の道をゆく左手が德川時代にこの宝庫を守った四聖坊の庭にあたっている。宝物に対する價値づけには、この間多少の新変化が見られるが、すでにのべたように、実用的利用は早くから停止され正倉院収蔵の品々を、帳内御物だけでなく全体に宝物的に見ようとする観

念がいよいよ強くなってゆく。たとえば、鳥羽天皇の永久四年（一一一六）そのうちの貴重品を勅封倉（北倉と中倉）に移されたが、その扱いにもこの観念は察せられる。貴顕の人々の正倉院拝見がはじまるのも、十一世紀頃からで、藤原時代から徳川時代初期にいたるこの種の拝見が、名宝拝見的であることはいうまでもない。将軍足利義政が、正倉院拝見の時に、名香を切ったのも、茶道の名物趣味からであろうし、それにならって天下を掌握した権勢に誇った信長が、やはり名香を切るといってきかなかったようなエピソードには、宝物にふれ、あるいは権力をたのんでその一部を私蔵したり、部下の大名に威勢を示すといった氣持が見えよう。こうして、徳川時代の半ば、科学的ではなかったが、はじめて学問の上での立場から、宝物の新しい價値づけがなされるまでの時代が、長く長くつづいたことになろう。太平洋戦争が終って皇室財産が國家の手に移されると共に、いま正倉院は國有財産として、内閣総理府に属する宮内廳がその管理に当っている。毎年十月、曝涼のおこなわれる際の開閉には、侍従が差遣されるが、今は勅使とはいわない。

下の写眞は正倉院関係の出版物．國華余芳は御物の色や形をそのままに描いた図録．上下2册で明治14年，印刷局発行．東瀛珠光は御物の写眞図録で正倉院御物図録と同傾向のもの．全6册，明治41・2年審美書院発行．正倉院御物図録は博物館で作ったもので，正倉院の御物を網羅してある点で有名である．既刊16册．この他に織物を扱った上代染織文などがある．御物修補図は，赤坂離宮内での御物修理状況を表わした絵巻物(明治22年)．

東瀛珠光

國華餘芳

正倉院略年表

天皇	年号	記事	西暦
聖武	天平十三	一月十四日、國分寺建立の詔を下す	七四一
	十五	十月十五日、天皇大佛造立御発願	七四三
孝謙	天平勝宝四	四月九日、東大寺大佛開眼	七五二
	八	五月二日、太上天皇（聖武）崩	七五六
		六月二十一日、聖武天皇御遺物と薬を大佛に献ず	
		七月二十六日、屏風花氈等を東大寺に献ず	
		十月三日、人参を出蔵	
	天平宝字元	五月二日、聖武天皇御一周忌を東大寺に営む	七五七
		閏八月二十四日、刀子人勝を東大寺に献ず	
	二	六月一日、大小王真蹟を東大寺に献ず	七五八
		八月一日、譲位	
淳仁		十月一日、不比等真蹟屏風を東大寺に献ず	
	四	六月七日、皇太后（光明皇后）崩	七六〇
	八	九月十一日、恵美押勝の乱により兵器出蔵	七六四
		十月九日、孝謙上皇重祚	
称徳	天平神護元	七月十五日、物を大佛に献ず	七六五
		九月八日、新銭神功開宝を行う	
	神護景雲元	二月四日、東大寺に行幸、物を献ず	七六七
	二	四月三日、東大寺に行幸、物を献ず	七六八
桓武	延暦六	六月、正倉院曝涼	七八七
	七	是年、山城國長岡に遷都	七八八
	十二	六月、曝涼	七九
嵯峨	弘仁二	九月、宝物を検す	八一一
	四	二月九日、犀角を出蔵売却	八一三
	五	九月十七日、屏風鏡子を出蔵売却	八一四
	十三	十月三日、大小王真蹟を出蔵売却	八二二
文徳	斉衡三	六月、宝物を検す	八五六
村上	天暦四	六月、東大寺羂索院綱封倉の物を正倉院南倉に移す	九五〇
鳥羽	永久四	是年、綱封倉重物を勅封倉に移す	一一一六
安徳	治承四	十二月二十八日、平重衡東大寺を焼く	一一八〇
後鳥羽	文治元	八月二十八日、後白河法皇天平宝物筆を以て大佛開眼	一一八五
後堀河	寛喜二	十月二十七日、北倉の鏡盗まる	一二三〇
後嵯峨	仁治三	三月二十二日、礼冠返納の途中破損	一二四二
後深草	建長六	六月十七日、北倉に落雷す	一二五四
後土御門	寛正六	九月二十四日、足利義政に蘭奢待を賜う	一四六五
正親町	天正二	三月二十八日、織田信長に蘭奢待を賜う	一五七四
後陽成	慶長八	二月二十五日、徳川家康宝庫修理	一六〇三
霊元	寛文六	三月四日、開封、宝物を検す	一六六六
東山	元禄六	五月十六日、開封、宝物修理	一六九三
仁孝	天保四	十月十八日、開封、宝物整理	一八三三
明治	明治八	三月、内務省の管轄となる	一八七五
	十六	七月、宝物を庫内に陳列し、曝涼の制を立つ	一八八三
	十七	四月、宮内省の所属となる	一八八四
	四十一	是年、帝室博物館の主管となる	一九〇八
大正	大正二	二月、宝庫解体修理	一九一三
	三	是年、織維品整理を始む	一九一四
上	昭和二十二	九月、[illegible]、図書寮の主管となる	一九四七

文化的價値

「勅封」のいかめしい扉の中に、とざされていた宝物を、今日のまた將來の眞の「民族の宝」として正しく継承して、祖先たちが理窟ぬきに深い思慮をこめて守ってきたこの宝に、正当な評價を與えて後世に傳えてゆくのは、私たちの科学や藝術理論が負う重大な責任であろう。今日まで苦心してつみかさねられた綜合的な研究の結果、数えあげられる正倉院の文化史的價値を、ここにいいつくすのは不可能であるが、まず第一にいえることは、宝物がすべて傳世品（発掘品でなく、地上にのこされてきたもの）としてはもっとも古く、しかもなお、昨日の作品のごとく完全な姿のものが多い点であろう。さらに第二には、「國家の珍宝」、累世の「傳珍」としてえらばれただけあって、製作の入念な優秀品が数多い。第三には、古くから文献にのみ傳わっていながら、他所に実物の存在しない多くの器物が、この中に存在していることがあげられるし、第四に、古代の社会の生活全般にわたる史料が、この中からさがしもとめられる点にも、價値がみいだされよう。

天平の文化は、前時代の飛鳥文化とならんで、日本文化の母胎である。正倉院はけんらん匂うがごとき天平文化の、もっともゆたかなコレクションであり、しかもここに保存される宝物には、その年代が明瞭で共存品の種類が多いことから、よそに保存された古代の遺品の眞偽や、時代判断の基準としても、えがたい價値をもつ。また、世に傳わる古典は正倉院に傳えられたものによって理解でき、器物その他に直接しるされた作者の名やその他の記述は、正史の欠けた点を補うよすがともなる。とくに工藝品は作者の名のはっきりしているのが少くなく、多くの文書の中には写経所の試驗の記録や、僧の借金の証文のようなものがあってそれらから、当時の法制や人口や、経済生活、社会問題の実態までが、うかがいえられる史料ともなる。また、技術史的には、陶器のうわぐすりや、鏡の製法といった、当時の技術水準も推定される。

このような、さまざまな價値を負って、しかも清新な美的感覚にとむ逸品こそ、民族の尊い遺産とよぶにふさわしい。だが最後に、私たちはこの宝の、世界文化とのつながりを忘れてはなるまい。一歩宝庫に入れば、その材料、文様、意匠、または宝物自体が、当時世界最大の國であった唐を通じて渡來し、極東諸國はもちろん、アラビア、地中海の文化までを、吸收している事実に驚くほかない。イラン、アフガニスタン、北インドをへて中國に入る古代の交易路は、世界文化史上「絹の道」とよばれているが、正倉院こそ、この「絹の道の終点」をなしたのである。

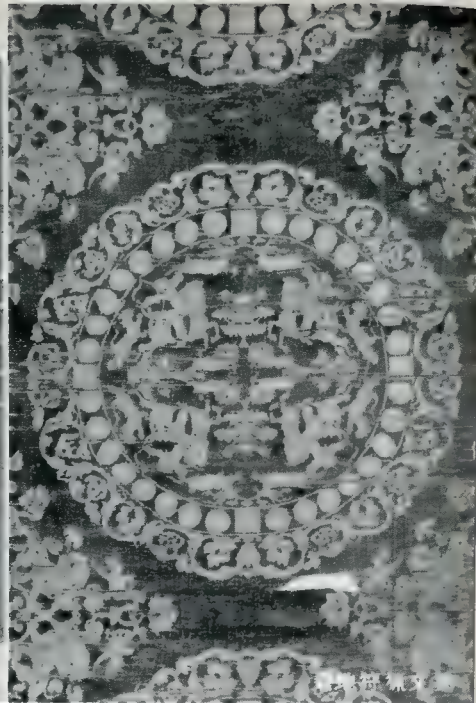
世界性

紺瑠璃坏

紺瑠璃坏．紺色のガラスのコップである．銀に金メッキした台が付く（p 38 参照）．浮出した環文は，貼りつけガラスで，その手法は，ガラスに金属を貼りつける手法とともに，ローマ（7 世紀）起源である．

紫檀金鈿柄香炉．紫檀に金で文様（花鳥文）を象嵌し，ガラス玉を嵌裝（はめこむ）し，柄には錦を貼る．炉座と柄も紫檀，炉及び鈕（つまみ）は金銅．柄香炉は紀元前 10 世紀のエヂプトの絵にみえている．柄頭の獅子形は，これと同類のものが，中央アジアから，発掘されている．

紫檀金鈿柄香炉

世界性

佐波理水瓶．佐波理とは朝鮮語で食器のことだがここでは，銅，錫，鉛の合金．水の出るところについている顔は，トルコ・イラン系の特徴をしめす．

碧地狩猟文錦．中央に騎馬で狩猟をする人物模様を四つ．その外側には円紋をめぐらし，さらに葡萄唐草を配する．ペルシア図案の典型的なもの．

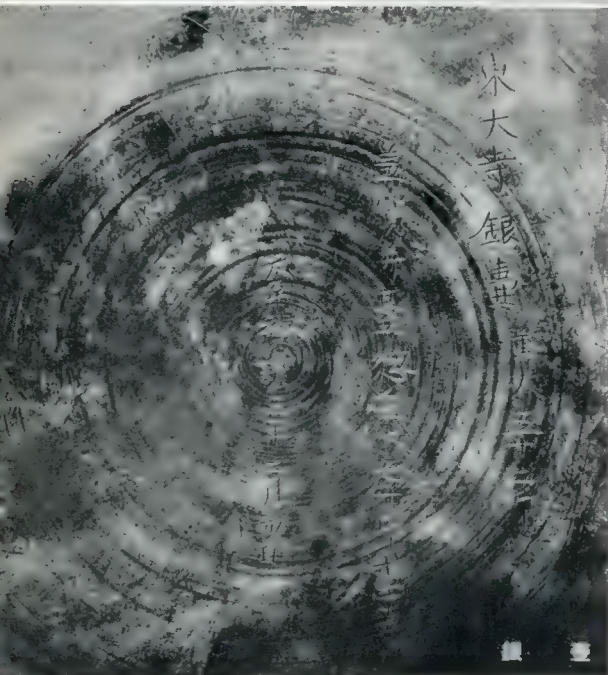
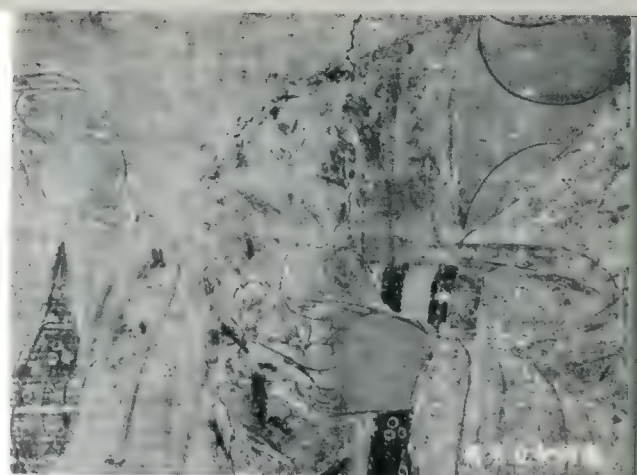
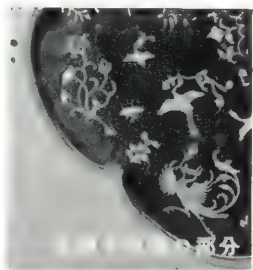
螺鈿紫檀五絃琵琶の捍撥．撥面に鼈甲を貼り，らくだに乗って，琵琶を奏する人物の図を，螺鈿であらわす．人物は，いわゆる胡人で，西方系である．

白石鎮子．四神と十二支を二つずつ組み合せた8個のうち，青龍，朱雀の一石．これは動物が相闘うのをモティーフにするスキタイ文化（前5世紀ごろ）の影響によるもの．

学術的な意義

鳥毛立女屛風（とりげりゅうじょびょうぶ）．下張りに伊勢連（いせのむらじ）云々の墨書．当時の工藝絵画の隆盛を知る．

刺納樹皮色袈裟（しのうじゅひしょくのけさ）．色変りの裂を重ねて刺縫して樹皮のような感じを出した．後世遠山袈裟となる．

金銀鈿荘唐大刀（きんぎんでんそうのからたち）の部分．鞘の末金鏤（まつきんる）は漆地にヤスリでおろした金粉をもって模様を現す手法で，蒔絵の起源といわれている．

金銀平脱鏡（きんぎんへいだつきょう）．中國でも絶えた平脱の手法を知る．

部分

銅薫炉（どうくんろ）．衣服などに香をたきこめるもの．後の龕燈と同じように，火皿がいつも水平を保っている．

子日目利箒（ねのひのめとぎのははき）．正月初子に養蚕の神を祀る儀式用．先のところどころにガラス玉が飾られているので玉箒という．万葉集にみえる大伴家持の歌と同日の日付がある．歌中の玉箒の意味がこれによってはじめて理解されたもの．

銀壺．彫りつけられた日付と重さによって，續日本紀をおぎない，斤量の基準を推すことができる．

銀　壺

臨王義之書

樂毅論

具注暦

学術的な意義

大宝2年（702）筑前國嶋郡川辺里戸籍．最古の戸籍．法制史研究の根本資料．裏を他の記録に利用していたため残ったもの．

一切経写司解．写経生等の待遇改善の要求をしたもの．他に同一職場同一賃金の思想のものもある．

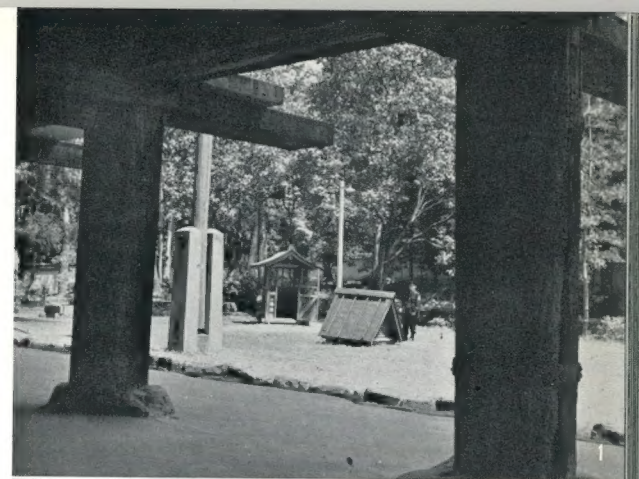
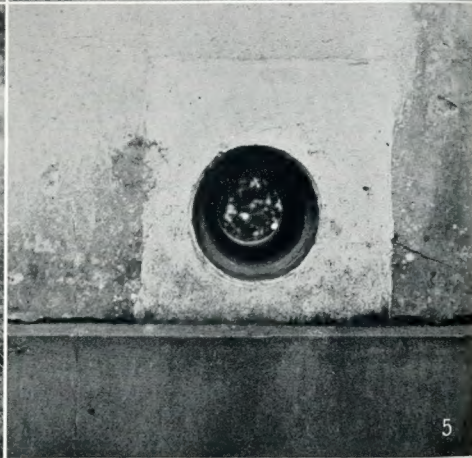
臨王義之書．左四行は王義之の書を臨摸したもの義之の書風を推し，それを尊重したことをしめす．

光明皇后の自署がある樂毅論．義之の書風を忠実に傳えたものといわれる．

天平18年具注暦．もともと暦であるが，覚え書を書きこむことがあって後に独立した日記になる．

筑前國嶋郡川辺里戸籍

一切經写司解

警　　防

1) 皇宮警察官の哨舎．晝夜，たえまなく警備に当っている．2) 消火栓には，ホースやその附属品が常置してある．避雷針は，構の内外二重に立てられ，とくに雷を警戒している．3) 山林火災に備えて，破壊消防具もある．他に自動車ポンプが一台ある．4) 火災報知器も，数箇所に設けられている．5) 土塀越しに送水する不便を避けるために，土塀にあけられたホース穴．7) 消火栓用の専用貯水池．貯水量1万石(180万リットル)．8) 宝庫附近の樹木が倒れかかるのを防ぐ支線もアースにつなぎ雷を防いでいる．9) 正倉院事務所の人々．6) 皇宮警察官．

岩波写真文庫目録

1* 木綿
2 昆虫
3* 南氷洋の捕鯨
4* 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10* 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19* 川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22* 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院（一）
41 彫刻
42 仏像
43* 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47* 東京—大都会の顔—
48* 馬
49* 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52* 醤油
53 文楽
54* 水辺の鳥
55 米
56 正倉院（二）
57* 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61* 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64* オーストラリア
65* ソヴェト連邦
66 能
67* 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90* 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94* 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97* システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105* 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110* 写楽
111 熊
112* 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123* アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126* 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132* 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136* 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184* 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道（南部）
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道（東・北部）
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道（中央部）
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖
271 福岡県
272 日本—1958年正月—
273 宮城県
274 鳥取県
275 タイ-学術調査の旅-
276 インドシナの旅
277 栃木県
278 屋久島・種子島
279 岩手県
280 地中海の史蹟めぐり
281 兵庫県
282 キリスト
283 京都府
284 インドの一断面
285 沖縄
286 風土と生活形態

*印は品切でございます

夜の宝庫

正倉院(二)
40
¥ 100